

カナダと日本

カナダが日本から学ぶべきことながら

マックマスター大学（ハミルトン市）教授

クラウス・H・プリングスハイム



秩序正しい日本

数々の極めて重要な分野において、カナダ人は日本人から、非常に多くのものを学び得る。学び得ると言いながら、実際は学んでいない。それは、幸か不幸かカナダ人が日本の業績に気付かずにいるか、日本の人々が自分達の成功を誇りに思いながらも、謙虚な態度をくずさず、同等の者として、時には学ぶ立場にある者として我々に接し、頼まれない限り、決して教師としての姿勢をとらないことに起因している。

今日カナダが抱えている重大な問題について、カナダが日本から、いかに多くのものを学ぶことができるか、また、カナダと比較して、それらの分野における日本の過去、現在の記録が、いかにすぐれているか、簡単に述べてみよう。

まず、犯罪だが、約千二百万の人口をもつ東京は、世界で最も大きく、最も人口密度の高い都市でありながら、世界で最も安全な都市でもある。一九七四年の東京における殺人事件は百八十九件、強姦は四百二十件だった。人口一千万（東京より二〇%少ない）のニューヨーク市

では、殺人が千五百五十四件、強姦が四千五百四十四件発生している。言いかえればニューヨークの犯罪率は、東京より八百九十九%多いということになる。東京における百八十九件の殺人のうち百八十件、強姦四百二十件のうち三百七十八件は解決されている。更に驚くべきことに、東京の人口は増加しているのに、犯罪率は実質上すべての種類において低下している。一九七四年には、東京の警察はたった四回しか武器を使用しなかった。（そのうちの二回は威嚇射撃。）若い女の子でも、年輩のご婦人でも、昼夜どんな時刻にでも、東京の街、しかも最も人通りの少ない場所でも、安心して歩くことができる。だれも、いやがらせをしたり、話しかけたり、ひつたりをしたり、強奪をしたりはしない。郊外でも、互いに財布をすり合うこともなく、一万、二万もの人がジンギスカンの軍隊のように肩と肩をふれ合って立っていたり、歩いていたりする。通勤ラッシュの中でも同様である。

セント・ジョンヤトロントの警察長官が東京を訪れば、非常に教えられるところが多いに違いない。なぜならば、東京を世界一安全な都市にしているものは日本人がだれもが、当然やるべきことをやり、規則を破るよりも、むしろそれに従い、犯罪を起すよりも、むしろ防止することを誇りとしているということであると同時に、日本の警察および日本の社会における警察のあり方も、その要因となっているからである。

失業率は、世界的不況の影響を受けて、日本でも上昇してきており、現在は一・八〜二%になっている。つまり、日本は失業率が六%と八%の間を上下しているアメリカとカナダよりも、三倍か四倍、うまくやっているとこのわけである。日本では、多くの人々が計算の対象外になっているので、それらの数字は現状を正確に反映していないとも言えるが、それでも尚、現在の日本の失業者数は約百万であるという事実は、日本人が、我々よりも三倍も四倍もうまくやっていることを示している。

インフレ率は、特に明るい局面といえる。一九七四年十二月、三木武夫首相が政権に就いたとき、消費者物価指数は年二六%の上昇を示していた。しかし、一九七五年四月までに、三木政権は、福田赳夫経済企画庁長官の秀れた指導の下に、それを五〇%引下げ、一三%までにした。また、一九七六年一月末に国会で行った演説の中で、三木首相は、一月のインフレ率は一〇%以下になると予想し、一九七七年中頃には、更にその半分引き下げたいと述べた。いったいどのような見事な成果をあげているのか、日本人に教えてもらわなければならないか。失業率の上昇、倒産の増加、消費の不振、資本支出の減少、今だに暗い輸出市場の展望などが示す通り、不況は、引続き深刻な様相を示している。しかし、一九七四年のGNPは実質二%低下したものの、一九七五年には、二%という控え目な数字ながらも、再び上昇した。三木首相は、一九七六年にはGNPを五〜六%上昇させ、そして今後十年間はその数字を保ちたいと述べた。一九七六年の経済における、三木首相言うところの「適正な安全成長路線」を促進するために、首相は、一四%増の総予算の中で、約八百六十万戸の公共住宅建設五ヶ年計画をはじめとする公共事業支出を二一%ふやして計上した。私自身は、七〇年代中期の深刻な不況も、徐々に治りつつあるのではないかと感じている。

儀式的なスト

労働に関して言えば、日本は六〇年代には、非常に好ましい、好都合な状態にあった。作業放棄はほとんどなく、あつたとしても、ほんの小規模なものであつた。日本の労働者のうち、組合に属している者は全体の三分の一に過ぎない。温情主義的経営が、組合を組織しなければならぬ程の不満はない、と労働者に感じさせているからである。しかし、この形は徐々に変化し始め、組合の組織化と